

異議異論が続出しそうなもの、こう並べてみると文化史的に系図研究はいかに極めて困難なものであるかということがわかる。

血族が多い、親類が多い、これは氏族勢力の拡大伸張であつて滋野氏いわゆる望月氏がこれである。滋野五十三家がこの類である。長野県北佐久郡の大半および小県郡の一部を自己の支配下として領有し、根をおろすこと約九百年の長期間にわたり、一大豪族として雄飛し政治的にも、経済的にもまた文化史的にも、信濃の一角東信の地に貢献したということが分明するし、断言しうる。

滋野氏は要するに清和天皇の第四皇子、貞保親王に源を発している。第五皇子とするは謬りである。三代実録にも大日本史でも第四皇子を採用しているし、また長野県小県郡瀬津村（現東部町）に貞保親王の御陵があり、親王奉斎の神社もある。しかも四之宮権現と奉称されている所から推定しても、第四の皇子まであることが正しいと思う。

貞保親王は清和天皇第四皇子であつて、貞観十二年（八七〇年）九月十三日の御出生、今から一、〇九八年前、望月氏の歴史が呱呱の声をあげてここに誕生した。（三代実録による）

元慶六年（八八三）正月二日三品に叙し、同年四月十二日上野守任（三代実録）、任中務卿（大日本史）時に御年十三歳であつた。母皇太后藤原高子、贈大政大臣藤原長良の娘、称二条后、貞観十二年三戌誕生、同十五年癸巳四月廿一日為親王贈源氏とある（三代実録）。南宮、或いは桂親王とも称し、琵琶に長じ管絃仙と申し奉つたことが諸書にみえている。

滋野の称号、親王が滋野井の御所に御在住あつたので滋野親王といった。居館の地名をとつて世人がそう

称した。（皇胤紹運録、帝王編年記）

中御門北西洞院西滋野朝臣貞主卿家也（拾芥抄）つまり貞主卿住居地に湧清井があり、よつて滋野井という名称が生まれたとある。北京の名井を記すなかに滋野井がある。（国花万葉記）

貞主とはいかなる人か。貞主は平城天皇より文德天皇にいたる五代に奉仕した文人である。文德実録によれば、仁寿二年二月（八五二）乙巳参議正四位下宮内卿滋野貞主卒す。貞主者右京人也。曾祖父大学頭兼博士猶原東人也。

遠い過去の歴史に右の学説が多分に実在する点からも、前記佐久の田舎に存在する大草家所蔵の滋野系図は注目に価する。新撰姓氏録には、滋野姓は天孫滋野宿禰直同祖神魂命五世孫天道根命後也。真武内伝、滋野宿禰直等祖也。旧事本紀もまた同じ。

滋野氏は益々もつていわゆる難解な氏族でもある。地方伝説では貞保親王が眼病となられ、都にては快癒できず温泉が各地に噴出する信濃国の名湯を訪ね、今の長野県小県郡海野の近くに住まわれ後、薨去されたので、なきがらを葬つた所が現小県郡東部町瀬津の宮嶽山陵であり、神として奉祀したのが四之宮権現であると長い間、われわれの祖先はかくいい伝え、先輩もまたこれを学説として教えられ且つ疑わなかった。ふり返えりみれば遠い遠い昔、今から数えてみれば一〇四四年も前、貞保親王は延長二年（九二四）六月十九日年五十五歳で薨去されたと、日本紀略にも大日本史にも記してある。封建時代の最上層貴族である親王が、病氣をなおす為とはいいいながら、果して山深い信濃、交通不便な山嶽重丈たる日本の屋根といわれる信濃へ下向されたであらうか。

万葉集卷の十四に

信濃道者、伊麻能波里美知、可里婆祢爾、安思布麻之牟原、久都波氣和我世。

都のある役人が信濃の国司庁の官人となつて赴任する門出に當つて、その妻が送つた短歌と推察するが、それほど道路網も不完全な、未開な山国信濃、統紀和銅六年（七三三）の条に、美濃信濃二国界経道險阻往還艱難仍通吉蘇路などあり、貴人がたとえ病氣とはいへ、好きこのんで辺僻な住みにくい浅間山麓に生活を営むなどということは考えられない。まず疑いをもつであらう。

さかのぼることおよそ十世紀前、何等の参考とする資料、これを立証する科学的な史料の僅少な時代、ただ想像をたくましくして理論的組立によつて推定しうることは、滋野氏の支配地、庄園が北佐久地区の大半と小県郡の一部であり、経済的にも文化的にも恵まれ訓育され、あらゆる面の高度化が達成され、そこに生活する人々が滋野家を尊敬し、貞保親王薨去により親王の遺霊を、分霊を遠い信濃の地に埋葬し、その徳に感謝し奉養の為に神社の建設をみたという説は奇とするものでもなく、穩当妥当な説ではないだろうか。天皇ご出身を最も誇りとする時代でもあり、滋野氏が貞保親王をもつて大祖であり遠祖でありとするは、間違ひではない。

そこで、論説順序として、あと先の感もあるが、滋野氏について若干解剖のメスを振つてみたいと思う。滋野氏は天道根命の出であり、早くから滋野を姓とし、世々文人をもつて知られた家柄であり、東人は大學頭兼博士であり、また貞主は一代の領学で、天長八年（八三一）祓府略一千巻を編纂し仁寿二年（八五二）二月年六十八歳で卒している。

その子貞秀女子二人、共に仁明、文徳の両帝に后して男子なく、歷代名門の家断絶を天皇これを惜しまれて、第四皇子貞保親王を継嗣とせしめられた。ありそうなことである。滋野家へ入つて滋野を名乗られ、滋野親王とも申された。当り前なことである、これでむずかしくされる滋野姓などを詮索する必要も認めない。大草系図によればその子が国忠という人であり、目宮、また善淵と称したとある。天曆二年（九四八）死去、領所の現望月町高呂台尾崎の原に葬ったといわれている。

善淵という人は滋野系図にあつて正史に記載されていない。ただし基淵という人はあるが、この人の事蹟はよく分つていない。目の宮と申したとすれば、眼病の伝説も生み、目に関する小説も創作されたのだろう。また国忠の室は善淵朝臣愛成が娘だったので、世人また国忠を称して滋野善淵ともいったとある。

この国忠の三代目に為道があり、永観元年（九八三）多田満仲の養子多田満成の娘を娶り、これより滋野流を源氏の一族とするといわれている。正しくは滋野氏は源氏ではなかった。ここにいたつて名実ともに源氏との血のつながりを持ったのはここらではなかっただろうか。為道―則広―重道この人からいわゆる滋野三家の清き流れの分流が望月、海野、瀬津と三分し、とうとうとして山をくだり、豪快に谷を流れくだり、時に沈滞し悲喜織りまぜた歴史を東信濃の地に展開して、三家の歴史のみならず、政治経済文化すべての分野に大きな影響を与えて流れ去つて行った。